

富士紡創立と和田豊治の富士紡再建

明治29(1896)年創立の富士紡績株式会社も水力組による計画で、森村市左衛門も富田鉄之助、神鞭知常、村田一郎、河瀬秀治、三野村利助らとともに有力株主・発起人として名をつらねていた。同社の魅力は「ただの水」を原動力にすることで、そのための工場は鮎沢川(酒匂川の上流)が流れる静岡県駿東郡六合村字小山に建設された。箱根の裏街道、落莫たる山間の僻地、現在同社の小山工場がある小山町小山の地である。当時ほとんどの工場は石炭を燃やす蒸気機関を動力にしていた。したがって山奥のために運搬費が相当かさむことを考慮しても、溪流で水車をまわすほうが有利であると計算できたのである。

資本金150万円に対する株式の申込みはすぐに満株になり、その権利には多額のプレミアムがついた。時は日清の戦勝直後、新会社がつぎつぎと生まれつつあった。

会長には日銀総裁や東京府知事を経て実業界で活躍中の富田鉄之助が、取締役には富士製紙副社長の村田一郎や小名木川綿布社長の神鞭知常らが就任した。操業を開始したのは明治31(1898)年の秋である。しかし、成績は予想とはほど遠いものだった。利益と配当は、32年上期が17,000円で無配、下期が58,000円で2分4厘、33年上期が49,000円で3分2厘、下期が6,000円で無配、といった具合。ところが日比谷平左衛門が同じころ創立した東京瓦斯紡績は、32年上期に1割2分、下期には1割8分を配当し、以後この高配当を継続していた。

株主からは重役を非難する声がわき起こった。信用は地に落ち、額面50円の株価は20円から16円にまで下がり、それでも買い手がないまでになった。このときまたもや動き出したのが森村市左衛門である。「日本に紡績業を起こすのは国家の急務だ」と説く森村を信じて株を買った人が多く、森村は彼らから何とかしてほしいと迫られてもいたのである。それはちょうど前記小名木川綿布の改革が成功したころ(明治33年春)で、森村は再度日比谷平左衛門の力を借りることにした。彼は病気がちで医者から人力車を厳禁されていたため、ある日、舟を雇って隅田川をさかのぼり、日本橋区中洲(現中央区)の日比谷邸を訪ねていった。それまで何度か交渉したが断られていたので、自宅に押しかけたのである。日比谷は不在だったので「それではお帰りになるまでいつまでも待っているから、玄関の端でもいいから貸してくれ」とそこへ座って待った。日比谷が帰宅すると森村は、「どうか3分間でいい。ぜひ面会してくれ」というので、その熱心さに感激して話を聞くと、森村は「多くの株主は私を信じて応じたのだから、一文といえども迷惑をかけられない」と迫っていった。

そのときのことを日比谷はこう記している。

「(森村氏の)誠心面にあふれ、義を重んぜらるるの厚きを見ては、もはや固辞することができぬ。私も果たしてその望みに副うことができるか否かは別として、森村氏の平生というものがかくのごとく立派であり、かつこの事件に対してかくのごとく立派な決心を有しておらるるのを見ては、進んでその援助に赴かざるを得なかった」

日比谷平左衛門はこうして富士紡績の再建に協力することを承認した。しかし、彼はまさに競争相手の経営者なのである。富士紡の株は一株ももっていない。定款には「取締役は百株以上の株主たるを要す」とあったので、森村は持株のなかから百株を日比谷の名義に書き換えた。こうして日比谷は富士紡績の取締役となって(明治33年7月)、同社の整理改革に着手した。平取締役ではあったがいっさいを任せるという了解のもと、専務取締役以上の権威と責任が付与された。

日比谷はさっそく改革の準備を始めた。しかしなにしろ、東京と工場とを往復するのに八時間もかかるので、もう一つ紡績会社を抱えている身ではとても無理だとわかった。そこで人さがしを始めたところ、まさにぴったりの人物が見つかった。この年の1月まで鐘淵紡績東京工場の支配人をしていた和田豊治である。彼はそのとき1割2分の配当をしている他の会社から入社を請われていたが、森村や日比谷に会って話を聞き、瀕死の会社に大手術をほどこすことに意気を感じたので、富士紡績に入ることにした(明治33年暮)。

会社は条件として和田の提出する意見はいっさい尊重することを約束し、翌年1月の総会で日比谷に代わって専務取締役就任を決定した。和田はただちに工場に近い丘の中腹に小さなわら葺の家を見つけ、向島の自宅を空家にして妻と老母とともにそこに移り住んだ。母を遠くに残しておいては気がかりで、社業に専念できないからというのである。そして朝は7時から出勤し、油がしみて黒光りのする詰襟の服を着、長靴をはいて四六時中、工場を巡視して歩いた。

一週間目に東京に帰り、第一回目の重役会議で彼は「事業は見込みがある。決して悲観するな」と発言して重役たちを安心させた。和田の出した結論は、「これまで人も機械も本当に仕事をしていなかったことが不振の原因なので、両方の能率をあげれば十分儲かる」というのだった。

それから彼は昼夜を問わず、自ら工場に立って機械の能力、保全方法の良否、操業の良否や遅速などを実地について指導して歩いた。「工業会社では経営者自らが工業上の知識を一通り持っていて、自分で機械の修理ができるぐらいでなければ、技師を使えるものではない」と考えていたからである。人心の弛緩と規律の退廃をなくし、経費の節減をめざして、工員と起居をともにしながら無用の経費の節約を命じた。工場用の請求品は必要不可欠なとき以外は絶対買わず、箒一本でもすり切れた廃品と引き換えでなければ渡さず、事務用の毛筆でさえ古い筆を持ってこなければ与えなかった。

和田が入ったとき最初に気づいたのは、工員不足で遊んでいる機械があるということだった。原因を調べると、募集して入ってきた女工が、毎月20人も30人も逃げていて、そのため周辺の要所要所に屈強の男たちを毎晩見張りに立たせているとわかった。逃亡の原因は日給わずか16銭五厘(今なら1,650円ぐらい)という低賃金にあった。そのことを実感した和田はすぐさま待遇の改善に着手し、女工の平均日給額を22銭に引き上げ、ボーナスの支給条件を改良し、食事の中身をよくし、通勤工員には安い部屋代の寄宿舎を建てた。さらに映画会や村芝居などを催して職工に娯楽を与えた。以来、逃亡者がなくなっただけでなく、工場内に生氣はつらつたる空気が満たされるようになった。

その結果、彼が入社した翌年の上期には、それまで累積した赤字を全部償却してなお8,000円(今なら8千万円)近い利益を次期に繰越し、下期には創立いらい7年目にして初めて6分の配当を行うことができたのである。以後、引きつづいて営業成績がよく、入社してから三、四年後には半期に150万円ほどの純益をあげるまでになった。重役の賞与は純益の一割五分で、その三分の二を専務が取ることになっていたのも、和田は半期で

15万円の賞与をもらえることになった。しかし、和田は重役会で突然「こんなにもらっては困るから、その分を社員に分配してやるようにしたい」と発言した。この提案はあまりに意外だったので、重役たちも「それはごもっともな説だが、そこまでしなくても」と言って容易に賛成しなかった。しかし、当時、相談役として出席していた森村は、和田の「労使協調」の理想を実行する機運を感じて大いに愉快になり、重役たちに「私は和田君の提案に賛成だ」と答えた。彼ら

は結局その発言に従わざるを得なくなり、純益金の分配による同社の賞与は「重役が3分の1、社員が3分の2」ということに決まったのである。このことはのちに会社の定款にも規定された。

日比谷平左衛門は、先に森村から譲渡された「百株」のその後について、こう報告している（『実業之日本』明治42年4月10日号）。

「私は単に（取締役の）資格を作る名義上のものとしてあえてこれ（百株）を領することをきかせず、その配当のごときもまた、これを森村氏に送っていたが、和田君の来るに及んでその全部を同君に譲り渡した。のち改革の業いよいよ成り、富士紡の機運、日に盛んなるや、森村氏はこの百株を私するに忍びずとて、功に酬ゆる一部として漿斗をつけて和田君に贈与した。しかるに和田君もこの由緒ある「百株」を私するは本懐にあらずとして、今は小山の公共事業に供することにしている。かかる精神は、あさましいことの行われる今の会社重役中において、稀に見るところの美例である」

富士紡績は、いったん再建しながら業界の不況でふたたび経営難に陥った小名木川綿布を買収し（明治36年）、さらに日比谷の健康上その他の理由があって東京瓦斯紡績と合併して（明治39年9月）、当初の二倍の10万錠という規模の大会社になった。それはちょうど創立から10年目に当たっていたが、その10年祭は同年11月2日に小山工場において行われた。そのハイライトは森村橋の渡橋式だった。

それより1年前、株主総会は「株主森村市左衛門氏に謝意するの件」を議決したが、森村はどこまでもその議を固辞しつづけた。銅像の建立も提議されたが彼は一蹴した。記念碑の建設も記念品の贈呈も拒否した。最後に残った案は、小山工場の門前、鮎沢川に架かる木造橋を鉄の橋に代え、これに「森村橋」の名をつけることだった。これにはさすがの森村も「いや」とはいえず承知した。粗末な木造橋は会社の隆盛とともに往来が頻繁になり、いずれは架けかえる必要があったからである。その森村橋は小さいがデザインがよく（設計は京都大学卒の秋元繁松）、その後の維持管理がよかったうえに最近修理されたので、90年以上を経た今日もなお真新しい橋のような姿で鮎沢川に架かっている。土木学会が編集した『鉄の橋百選』（平成6年）にもとりあげられた。

創立10年祭が終わると、和田専務を社長にしようという画策が重役や社員のあいだに起こった。しかし、和田は時期尚早だといって受けない。そこで彼らは、もう一人の恩人である日比谷平左衛門の偉功を表彰すべく動き始めたが、森村もその積極的な推進者になった。その結果、森村橋の開通式から1年半後に、小山第3・第4工場の遊園地に日比谷の銅像が建てられたのである（明治41年5月、作老は近代彫刻の先駆者といわれる大熊氏広。本体は戦時中に供出のため撤去されたが、台座は今も残っている）。

砂川幸雄 著 森村市左衛門の無欲の生涯から

二 土木および建築

当社の生命とする水力については、既述のように、すでに水力組の田代四郎、一井保の名義をもつて、関係村長との間に水利権に関する交渉がまとまっていた。正式の契約も六合村は明治28年10月、菅沼村は翌29年2月に成立していた。したがって当社としては、右の水利権契約全部を譲り受ける手続きを終えればよかったのである。

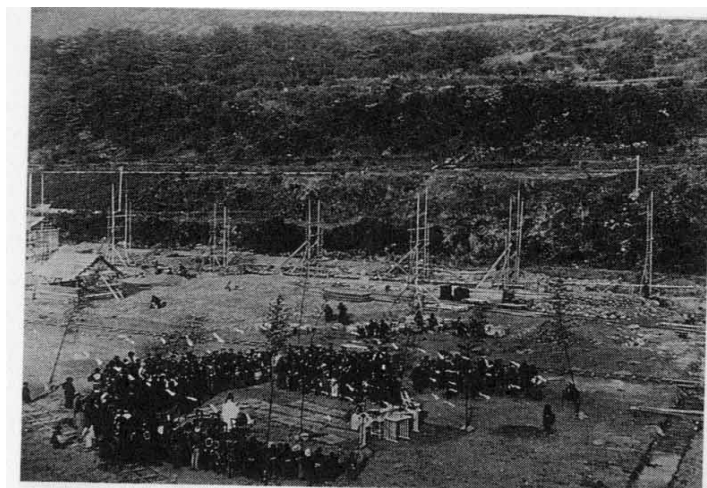
こうして菅沼村字茅沼から字天神下および柿木田を経て字棚下まで、須川より鮎沢川へ分水の件は、29年4月6日付をもって、静岡県知事から許可が下った。

土地の買収についても、岩田蜂三郎老の決死的尽力により、明治26年、すでに工場用地および水路用地の大部分が買入れ済みとなっていた。ただその後計画が著しく拡張されたので、さらに工場用道路敷地その他付属用地の買増しをしなければならなかった。

はじめは坪75銭ぐらいであったが、買収が進むに従って次第に騰貴の傾向を現し、ついには2円から2円50銭を唱えるに至った。この地主の売惜しみの態度と村民の反抗的気勢とを排して比較的安く用地を買収し得たのは、主として岩田の熱心な斡旋の結果であった。

こうして土地の買収が進むに従い、明治29年8月末初めて鍬入れを行い、以後地ならし、水路開削、築堤、道路敷設と次第に工事を進めたのである。

土木事務の担当は、村田四郎取締役であったが、土木の設計と工事の監督とは、当社創立以前から因縁の深い磯長得三にすべてを委嘱した。磯長は内務省地理局の修技生であったが、明治11年のころ独立して自ら東京測量社を経営し、当時日本における民間測量社の元祖として名声の高かった人である。この人が全責任を負って土木工事万端を指揮したのである。また水道の設計



水路開削工事

第一工場地鎮祭(明治30年5月)

は中島鋭治工学博士がこれに当たった。博士は東京市の水道を一切設計したほどの人で、斯界の権威者と謳われていた。このように指揮者は申し分なかったが、土木工事そのものは思うように進捗しなかった。元来が野天仕事のことであるから、俗に「御厨の私雨」と称して、いま晴れていると思うとにわかになどと降り出す。そうするとたちまち休業である。工事がせっかく進捗しはじめたかと思うと途中で買収土地に問題が起こり、あるいは土工同士の喧嘩など故障百出して、そのために水路の工事、工事地盤の切取り、地ならしなど、いずれも予想外の日数を要した。特に大きな痛手は明治30年の箱根地方の出水であり、入夫をその復旧工事に奪われて、工事の進捗に著しい支障を来した。

こうした幾多の問題と闘いつつ、土木工事は遅れながらも進行していった。明治30年上期中に、まず駅・工場間の築堤と軽便レールの敷設がなり、月年下期中に工場敷地下段の切取り、地ならしおよび吐水路の開削が完成した。工場敷地上段の地ならし、水路、築堤および鉄管敷設などが竣工したのは31年上期であった。

次は工場および付属建物の建築である。その設計および工事の監督一切は、妻木頼黄工学博士を顧問として囑託した。博士は内務省の技師で、これまた斯界の権威者と謳われた人である。何しろ当時としては珍しい大工事で、工場用の柱が8寸角、梁は8寸の1尺6寸、長さ36尺の米材が河畔に山のように積まれたのは、まさに天下の偉観であった。まだ米材の珍しかった時分のことで、東京や遠州方面から、わざわざ材木商などが見物に来たほどであった。

ところが、いざ建築にとりかかってみると、工事が遅々として進まず、土木工事よりもはなはだしいものがあつた。その原因の一つは、諸物価暴騰のため材料代と労賃とが最初の請負価格より騰貴したことであり、もう一つは明治30年の風水害のため、鉄道が破壊されて建築材料の運搬が困難になったことであつた。そこで重役会も気をもんで、土工急施懸賞金四千円の支出を決議したり、建築急施奨励金として請負金額の割を交付することを約束したり、百方督促して建築工事を急がせることになった。

その結果建築工事もようやく進捗し、30年上期にはまだ事務所と社宅の一部しかできていなかったものが、31年上期中に綿糸工場、絹糸工場をはじめ、ガス室、寄宿舎、食堂、倉庫、炊事場、病室、医務所、自炊舎、その他ほとんど全部が落成するに至つたのである。

「富士紡績100年史」から



小山村の激変

此の如くして富士瓦斯紡績会社は絹糸綿糸紡績に於て、天下第一の大会社なるのみならず、水力事業に於てもまた有数の会社となりしは、豊治君が如何に水力事業の前途に重大の望を繋けたるかを窺ふを得べし。

然ども絹糸綿糸事業の内容、水力事業の委曲を説くは、富士瓦斯紡績会社の歴史の領分にして和田豊治君の伝記の正當の領分にあらず。

茲には明治三十九年十一月 富士瓦斯紡績会社が小山工場に於て創立十年記念祝典を行ふて凱歌を挙げ、栄冠を着けたる一事を記して満足せざるべからず。

之と同時に社運隆盛の記念として、森村翁頌徳の意を表せんがために鮎澤川に森村橋を架設せしを今併せて其落成式を行ひ、幾千男女の歡囂小山に満ちしが、小山の父老は今昔を懷ふて殆ど夢寐の戚に堪へざるものありたりき。

十数年前にありては小山は駿東郡六合村に於け一字のみ、二十二年東海道に鉄道線路の敷設せられし時、停車場を此地に設くるがため取つて駅名としたるに過ぎず。然るに富士紡の此地に立てらるるや、鳥逕獣道は變じて工場となり、鮎澤川の峡谷は電燈煌々たる不夜城となり、菅沼村二十四戸、六合村五戸、小山舊部落下郷に四十七戸、藤曲に六十八戸、其他附近を合算して三百四五十戸に過ぎざりしもの、今や数千戸、住民三萬餘人ありて居然たる大市街となる。

小山の發達は實に日本村落變遷史上の一大驚異と云はざるべからず。



和田豊治(1861～1924)

和田豊治の生涯

当時、倒産の危機にあり、誰もが見放しかけていた富士紡績に入社し、見事立て直し、後に「第二世渋沢(栄一)」と謳われ、交友の広さ、面倒見の良さから「友を持つなら和田を持て」とまで言われるようになった人物。ここでは、そんな彼とはどのような人物であったのかを紹介していきたいと思います。

中津時代



和田公園内の誕生地碑



後に本籍を北門通りに移す
(和田公園内の和田豊治翁頌徳碑)



書生時代を過ごした旧村上田長宅

1870 年、豊治は大久保逕造の家塾に入り四書五経を学ぶようになる。そして、1876 年 15 歳のときに、中津中学校に入学する。在学中は、医者を目指していたこともあり、中津の医者村上田長のもとで書生として過ごす。1879 年になると、和田豊治は中学校を卒業し、東京か大阪へ遊学を望むが、貧乏士族であった彼の家では到底及ぶものではなかった。

また、同年の 8 月に父薫六が死去し、家督を継いだ事で、上京を一旦断念して村上田長の下で書生を続けていた。しかし、翌年の 1880 年には祖母も死去したことで遊学を決心し、邸宅の一部を売り払い、その資金にあてた。これを知った村上田長の取り計らいにより、当時京都で中外電報という日刊新聞を発行していた濱岡光哲という人物から和田が東京から通信を送るという名目で毎月 10 円の資金を受けられるようになった。

上京と渡米

上京を果たした和田は 1881 年に東京大学別科(現在の東大医学部)を受験するが不合格となり、

医者への道は暗礁に乗り上げてしまう。そのことで、和田は翌年の1月10日に入学保証人を小幡篤次郎が引き受ける形で慶応義塾に入学する。入学2年目の1883年に、濱岡氏からの援助が途絶えると、ここでまた村上田長が一計を案じる。和田豊治を中津開運社の貢進生に推薦し、毎月7円の学資援助を得るというのである。

アメリカ留学を考えていた和田豊治は1884年に慶応義塾を卒業し、桑原虎治、武藤山治と一緒にアメリカに渡る。場所はサンフランシスコで、当時中津出身の甲斐織衛が営む甲斐商店があり、村上田長が紹介状を書いてくれたという。サンフランシスコに到着した3人は甲斐氏に面会した後に甲斐氏の友人で新聞記者のジャコブスという人物を紹介される。この人物の意見によって3人はタバコ製造所で働く事になる。桑原、武藤両氏はすぐに、スクールボーイや皿洗いに仕事をかえるが、和田はしばらく続け、和田は甲斐商店サンフランシスコ支店で働く事になる。その後は支店長にもなり、30歳になるまでの6年間でアメリカで過ごして帰国する。



甲斐商店展示場での和田豊治
出所：『和田豊治伝』（喜多貞吉、和田豊治伝編纂所、1925年発行）



明治二十年三月サンフランシスコ甲斐商店の記念撮影(左から2番目、和田豊治)
出所：『和田豊治伝』（喜多貞吉、和田豊治伝編纂所、1925年発行）

日本郵船から三井へ

帰国した和田は1891年に慶応同窓生の楠本氏の斡旋により日本郵船に入社する。神戸支店に配属された和田は外事係と称した外国荷物を扱うところで働いていた。この翌年、和田は結婚を考え村上田長に相談する。そのことで、川端楊坪の四女織衣と結婚することになる。

しかし、支店長との関係が悪化したことや中上川彦次郎に誘われたことをきっかけに和田は日本郵船を去る。そして、同年には三井銀行に入社し、横浜支店長次席となる。1893年には中上川が諸工業所を統括するために設置し、朝吹英二が主任を勤めていた三井工業部に転任し、鐘ヶ淵紡績会社本店支配人となって向島の工場に勤務することになる。紡織の知識の無かった和田は根本知識の習得のために職工と伍して研究に励む。そして、火災保険加入や防火設備を備えて火事対策をしたり、職工慰安改善に努めていく。

そんな時、鐘紡神戸支店長を務めていた武藤山治と性格による経営方針の意見対立や和田・武

籐優劣論等で二人の間が悪化する。親交の厚かった日比翁助や濱口吉右衛門等が調停を試みたが失敗に終わった。これに頭を悩ませた中上川彦次郎と朝吹英二は三井呉服の要務として欧米へ紡織並びに綿花の事業調査に出す。しかし、和田が帰国してみると三井の方針が変更されていた。

富士紡績入社

帰国した和田は三井を辞職し、1901年に富士紡績株式会社専務取締役となり家族で静岡県の小山に移る。当時富士紡は倒産の危機にあり東海道線小山駅の「赤煉瓦の石塔」とか「赤煉瓦の事業失敗の記念碑」と揶揄されていたので、富士紡入りを反対する者は少なくなかった。当時中津紡績会社支配人(後に富士瓦斯紡績会社常務取締役となる)だった高橋茂澄は驚きと心配で小山まで訪ねに行っている。

小山に移った和田は工場などを調査し改善すべき点を調べていく。一番に驚いたのが社員の規律頹廢ぶりであった。社員の気は弛緩の極みで老廃の工場の様な気が工場に充満していた。また、問題点を3つに絞った。1つ目は、動力として豊富な水力を利用していたにも関わらず生産費が高かったこと。2つ目は、機械の能力を発揮できなかったことによる効率の悪さ。3つ目に製品が他社よりも劣っていた事であった。そして、改善すべき点を定めると、職工や社員を直接指導して改善に乗り出していく。

中津近代人物情報室から <http://www.h4.dion.ne.jp/~yoshisan/index.html>

豊門会館の設立

ここで、和田社長にゆかりの深い豊門全館について記しておきたい。
財団法人豊門会館は、地域住民並びに従業員の教育、保健、慰安などの場を提供する目的をもって設立された。基本財産については、和田豊治、森村開作、日比谷新次郎、浜口吉右衛門（二代一、川崎栄助一二代一、藤井諸照、伊東要蔵、湯山寿介、持田巽、宮本清三郎、鹿村美久、林田操、朝倉每人、緒方正亮、長野善五郎の計十五人からの寄付になる当社株二千株と金十万円が充てられ、大正十二年五月に設立申請を行い、内務大臣の許可を得て翌十三年八月に登記された。大正十三年三月に死去した和田社長の遺志によって、同家の向島の邸宅延べ百二十六坪が遺族より寄贈さ九、直ちに小山町藤曲における庭園の築造と邸宅の移転工事に着手し、大正十四年十二月に落成、翌年五月十六日には盛大な開館式が挙行された。これを豊門会館と名づけたのは、当社の四大恩人の功績を永遠に記憶せんがためである。すなわち、和田豊治の「豊」と、富士紡の三門と称せられた森村市左衛門、日比谷平左衛門、浜口吉右衛門の三翁の「門」とったもので、大正十年十一月に死去した川崎栄助翁の発議による。

かくして、小山の小高い丘の上に建てられた豊門会館は、正面に富士の霊峰を仰ぎ、周囲には近く迫る山々を築山のごとく廻らし、いながらにしてその一大景観を望むことができる。会館の建物はその後の増築によって総建坪三百余坪に及び、山間とは思えぬ完備された設備と五千三百余坪の庭園に囲まれ、付属施設として設けられた五千四百余の運動場並びに公園とともに、社の内外を問わずに多目的施設として大いに利用されている。

（富士紡績 100 年史）

名称 財団法人 豊門会館（ほうもんかいかん）

事務所 主たる事務所 〒410-1304 小山町藤曲 178 番地

電話番号 0550-76-1414(03-3665-7606)

従たる事務所

代表者 理事長 廣瀬貞雄

目的 この法人は、公衆会同の便益とその保健修養教化慰安を計ることを目的とする。

- 事業
- 1 会館、宿舍及び庭園の設備
 - 2 講演会、講習会の開催
 - 3 慰安修養に関する演芸会の開催
 - 4 運動競技保健衛生に関する施設
 - 5 その他目的達成に必要な事業

設立許可年月日 大正 13 年 7 月 31 日許可

許可番号 静 2 部第 40 号

設立の登記 ** 年 月 日登記

理事 数 若干名 （任期 3 年）

監事 数 若干名 （任期 3 年）

社員 数 - 人

富士紡の三門について

浜口吉右衛門

先代浜口吉右衛門氏は、我実業界の桂石として奇骨稜々を以て鳴る。紀州有田郡廣村の豪家に生れ、累代東京日本橋区に店舗を有し、醤油、食盛及紀州産物の問屋業を営み、老舗として其名頗る高く、夙に亀田鶯谷に学び、後慶応義塾を出でて衆議院議員に選挙せられたること三回、其の間財政整理国本培養論を献策し、或は富士瓦斯紡績株式会社の取締役会長として拮据経営せられ、其高砂製糖株式会社社長、豊国銀行頭取、浜口合名会社代表社員として幾多実業界に貢献し、後貴族院議員に推され、其任に在ること七年、大正二年の冬病を得て復起つ能はず。褥中左の一詩を遺して逝けり。

晩日繭々照落楓　　憐吾浮世命將窮
請君休語平生事　　五十二年一夢中

危篤の報天聴に達するや特旨を以て従六位に叙せられた。

1862～1913（大正2年）/衆議院議員3期（1896～1902）・進歩党・憲政本党、貴族院議員（1907～13/多額納税者）/浩の母方祖父/

濱口家は紀州の有力家であり、代々、日本橋に老舗の醤油・塩・紀州物産の問屋を構えていた。9代吉右衛門は慶応義塾を出て、醤油醸造販売業、植林事業を営む。のち、衆議院議員となり財政整理国本培養論を建策して重視される。/鐘淵紡績重役、富士瓦斯紡績・九州水力電気・高砂製糖社長、豊国銀行頭取、朝鮮銀行幹事、濱口代表社員、猪苗代水力電気取締役等を歴任。

森村市左衛門

男爵森村市左衛門氏は、我貿易界の元勳にして最も完全なる意義に於て紳士たり綿商たるの人であつた。累世土佐侯の用達を業とし、年少より藩の先輩板垣細川等の名士と相往來し、西洋文物の事情を聞きて得る所あり、横浜に雜貨商を開き成長の役に際し、弾丸雨飛の間を奔走して軍需品を辦じ、明治八年令弟豊氏を北米ニューヨークに渡航せしめて支店を設け東西相呼慶して牢固なる基礎を確立し、本邦貿易商の巨擘となるに至った。此間日本銀行監事、東京商業会議所議員たる外、甲武鉄道、横浜生糸合名会社、富士製紙、富士瓦斯紡績等の重役又は相談役たりしが、大正八年七月八十一歳の高齢を以て芝区高輪の自邸に逝去された

洋食器のノリタケ、衛生陶器のTOTO、電力用碍子の日本ガイシ、点火プラグの日本特殊陶、洋式タイルのINAX・・・明治初年、森村市左衛門が手を染めた陶器輸出から、セラミック産業を代表するトップ企業が育った。少年時に不平等条約を目のあたりにして、“官”に頼らぬ「独立自営」の精神のもと、ひたすら『國利民福』に貢献する生涯をおくった。

日比谷平左衛門

日比谷平左衛門氏は本邦紡績王として名声晴々たり。新潟県北蒲原郡に生れ、幼時江戸に出て・糸繰商店松木屋の丁稚となり、余暇を拾ふて濁力和漢の学を修む、終に擢てられて支配人となる。時に年十八爾來店舗の改革を企て励精怠るなし、三十歳にして日比谷家の養嗣となる。時恰も維新の変事に際し、商家の破綻頻々たり、主家亦其の渦中に陥り、衰頹其の極に達す。親戚知己相會して復興を謀るに當り、其の実権を委ねらる。慈に於て実弟を主家の養子となし、兄弟克く協和して家運の挽回を図り、各地に支店を設けて内外綿糸綿花の卸業を営む。明治二十九年資本金一百萬圓を以て、東京瓦斯紡績株式会社を創設し、自ら社長となり綿花の輸入を防過す、此の外鐘ヶ淵紡績、富士瓦新紡績、日本煉炭、九州水力電気等の諸会社の重役に挙げられ、大正二年正六位に叙せられ、大正十年一月病の爲めに遠逝された。

「偉人和田豊治翁」から

58 ほうもんかいかん (財)豊門会館

住居／駿東郡小山町藤曲／木造2階建／明治～大正

豊門会館は、富士紡績の従業員並びに地域住民の教育・娯楽・保健・慰安等の場を提供するために設立された財団法人で、会社重役一同からの寄附によって。設立申請を大正12年5月に行い、翌年8月22日に登記された。「豊門」という名称は、初代社長和田豊治の「豊」と、富士紡の三門と称せられた森村市左衛門・日比谷平左衛門・浜口吉右衛門の三翁の「門」をとって名付けられたものである。和田豊治は、明治29年(1896)の富士紡績株式会社創業時から続いた経営不振の再建のため、明治34年専務取締役役に抜擢された人物である。彼の就任後、他社との合併を経て、39年富士瓦斯紡績株式会社と改称して10周年を迎える。その記念として創業時より尽力した森村市左衛門にちなんで鉄橋「森村橋」を開橋した。大正5年(1916)和田は社長に就任する。12年9月の関東大震災で大被害を受け、和田は陣頭に立って復興事業を進めるが、13年3月急逝してしまう。その後、彼の方針に従って復興が進められ、その中の福利厚生施設として豊門会館が設立されたのである。建物は和田豊治の遺志によって、東京向島にあ

った同家の邸宅が遺族により寄贈され、14年これを受けて、小山町藤曲のふじまがり小高い丘の上に約5,300坪の庭園を築造して旧宅の移築を行った。同年12月に豊門会館の施設が完成し、15年5月盛大な開館式が執り行われた。また庭園内には和田社長の記念碑が建つ。

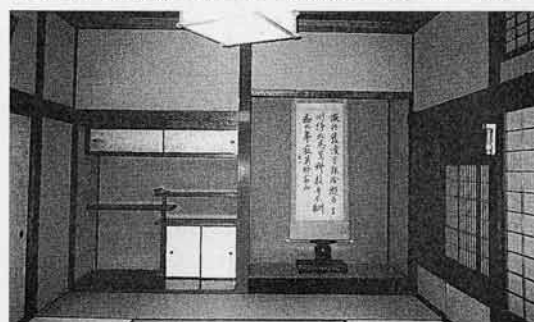
豊門会館は、木造2階建、入母屋造、棧瓦葺に木造平家建、棧瓦葺が付属する和館部分と木造平家建、寄棟造、サンルーム付の洋館部分からなる。

和館に入母屋造の主たる玄関を設け、双折棧唐戸を開くと、モルタル磨き出し四半敷目地切の土間が現れる。続く畳敷の八畳正面に渋沢栄一書の「豊門会館」扁額を掛ける。右手の応接間は洋間とし、建具は洋風のドアを用いるが、正面の窓外側には格子を打ち、外観は和風でまとめる。1間幅の畳廊下を間に挟み、雁行形に座敷を配置し、4尺幅の縁を廻す。座敷部分が2階建になっており、階高は12.95尺と高く、内法高は京都風で5.7尺、柱は4.2寸角とし、母を用いた母普請である。

1階の庭に面した十畳と八畳が座敷の扱いである。十畳は、薄縁敷の床の間と床脇には違い棚・天袋・



正面



1階十畳



南面



洋館

地袋を備え、付書院を付す。床柱・落掛は梅、床框は真塗とする。床脇は樺を用い、天袋小襖は金もみ紙を張る。付書院の欄間は杉空板に朝顔を透かし彫りにする。壁はやや赤味がかった土塗壁である。天井高は9.4尺と高く、二重廻縁の竿縁天井とする。八畳は樺一枚板の床の間と平書院を構える。縁側は1・2階とも同様に梅樽板張で、化粧屋根裏天井とする。

2階も庭に面した八畳と十五畳を座敷とする。八畳は、樺一枚板の床の間と、床脇に地袋を設ける。地袋小襖の引手は、珍しい題材で右側を「奴」、左側を「僧形」とする。天井は畳割りと同様に竿縁で区切られ、長手に年輪を見せた杉の一枚板張りである。十五畳には1間半の薄縁敷の床の間、両脇に棚、付書院を付す。床の間前には同幅の畳を敷く。右側の床脇天袋の小襖は金箔押しで、引手は「梅に鶯」である。付書院の欄間は桐板とする。

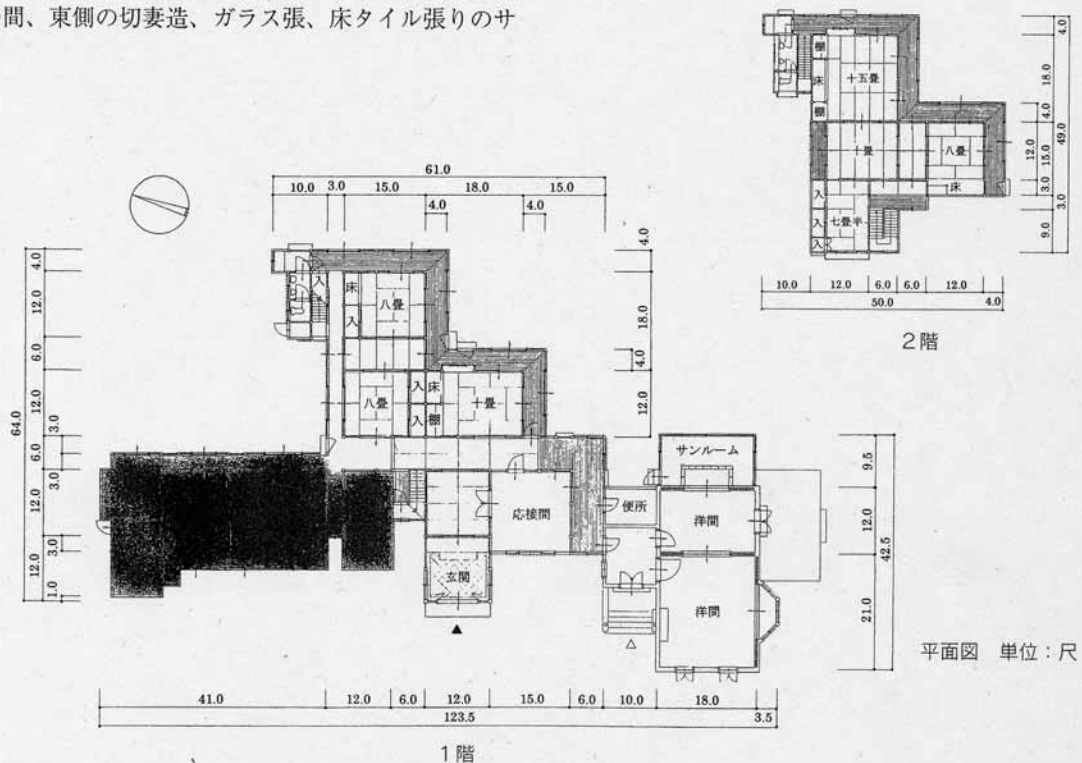
和館の南側に洋館が続き、基本的に尺で計画される。和館寄りに洋館用の玄関が設けられ、主室と次の間、東側の切妻造、ガラス張、床タイル張りのサ

ンルームから成る。床は寄木張、壁は壁纸を張り、部屋境には引込戸が設けられる。開口部は上げ下げ窓とし、正面外側には鎧戸を、内側には木製のカーテンレールが備えられる。主室の北側には白大理石の暖炉が設けられ、南側は台形に張出す。天井は両室とも漆喰塗りで、中央に円形照明座を造り、主室の全面に施された漆喰装飾は見事である。

和田豊治郎としての建立年代は確定できないが、明治から大正の建築と考えられる。また敷地内には、昭和初期に建てられた木造2階建、下見板張の中堅社員独身寮「豊門寮」がある。（新妻淳子）

<参考文献>

- 1) 富士瓦斯紡績株式会社小山工場『写真帳』室伏写真館 1927年
- 2) 富士紡績株式会社社史編集委員会『富士紡績百年史』上巻 富士紡績株式会社 1997年
- 3) 『小山町史』第八巻 近現代通史編 小山町 1998年



清水組

富士瓦斯紡績小山工場第三工場が明治 40 年に竣工しているが、これが県内における清水組の仕事として早い例である。昭和 2 年の浜松市公会堂以降、中村與資平の設計した作品をかなり多く施工している。現存するものとしては、遠州銀行本店(現静岡銀行浜松支店、(昭和 3 年)・浜松銀行集会所(現浜松銀行協会、(同 5 年)・第三十五銀行本店(現静岡銀行本店、(同 5 年)等が挙げられる。現存はしていないが、昭和 17 年から 20 年にかけて、陸軍少年戦車兵学校・沼津兵器工場事務所・中島飛行機浜松製作所等、軍事・軍需関連の建設にも多く関わっていた。

静岡県の近代化遺産から

妻木頼黄 つまき よりなか

安政 6 (1860) 年 12 月 10 日、江戸の赤坂にて旗本の家に生まれた。

明治 7 年、工部省電信寮で電信技術を学び、明治 8 年に慶應義塾に入塾し、明治 9 年には渡米し、翌年帰国した。明治 11 年、工部大学校造家学科に入学するが、明治 15 年にコーネル大学に留学するために退学した。明治 17 年、コーネル大学を卒業し、R. H. ロバートソン建築事務所に勤務した。

明治 19 年、中央官庁集中計画により臨時建築局の技師となり、留学する河合浩蔵と渡辺譲と共にドイツに派遣された。ロンドンに帰省する J. コンドルも乗船しており、ドイツまで航海を共にした。翌年、諸官庁の工事着手が議決し急遽帰国が命ぜられたが、妻木は病床にあったため河合浩蔵と渡辺譲らに遅れて帰国した。東京裁判所は既に渡辺譲の監督により工事が始まっていたが、妻木が監督を引き継ぎ完成させた。

明治 32 年、辰野金吾と共に議院建築調査会の委員となり、翌年、臨時税関工事部建築課長となった。明治 34 年、欧米出張の後、総務局営繕課長、明治 37 年、臨時煙草製造局建築部長、翌年、大蔵省臨時建築部部長を歴任した。その一方で、明治 21 年に設立された工手学校(工学院大学の前身)の会計主任になるなど、その運営に尽力し技術者を養成した。

明治 43 年、議院建築準備委員会となったが、明治 45 年頃から再び病状が現れ療養に専念した。大正 2 年に大蔵省を退官したが、大仏殿修復工事顧問などを務めた。大正 4 年、持病が再発し入院することになり、大正 5 年 10 月 1 日に勲二等正四位瑞宝章を授与されたが、その十日後に亡くなった。

主な作品：東京府庁舎(現存せず)、横浜正金銀行本店<重文>、新港埠頭煉瓦第二倉庫、大阪麦酒吹田醸造所、丸三麦

明治四十年以後の豊治君 「向島に新邸を作る」

和田豊治君が富士紡績会社を蘇生せしめ発達せしむるがために苦心し、如何に努力したるかは已に前章に於て之を説きしが、今や其苦心努力漸やく酬いられて会社は沈淪の中より隆起したること巨鯨が大波の中より首を挙げたるが如きものあり。而して其回復の事僅に三四年の間に行はれ殆んど名醬が起死回生の奇蹟を行ふたるが如きものあるを以て、和田の名は実業社会に於て凱旋將軍の如くに傳へらるるに至り、豊治君は之より漸やく其手を一般の実業社会に広げんとするの志あり。之より先き三十七年小山工場の秩序紀律稍稍立ちて会社の前途安全なるべきを見るや、豊治君は其家族を東京に返して一家を経営せしめ、自から小山に居住して時々東京に出でしが、暫らくして小山に居る時と殆んど相半ばするに至りたり。前年鐘紡の支配人時代に購入したる向島の海棠園に新宅を建築したるは此頃にある。豊治君今や風流第一を以て任じたる柳北翁の名園を管領し、花晨時として園遊会を催し多方面の友人を召集す、其得意思ふべきなり。此新邸に關して楠本君の語る所頗る面白き逸事を傳ふるものあるを以て此に掲ぐ。

「和田君の初めて購入したる時は母屋の方は茅葺にして書齋の方瓦葺なりしと記憶す、余は三十四五年頃本郷に居宅を構へ居りしが、越えて三十八九年頃和田君新に建築に着手するや、余に向つて君は建築に経験あり來つて余の新普請を檢分せよと云ふを以て、余即ち和田君の新築場に至り和田君に向つて此普請成就の曉は柳北先生の書齋は不用となる譯なり、如何に之を処分せんとするやと問ひしに、和田君別に処分に関して考慮する処なしと答ふ、仍て余は和田君に向つて実は郵船会社に社長たりし故吉川泰次郎氏の遺族今境遇甚だ豊ならず、憐むべきの状態にありて其舊本邸は目下義雄氏に売却し一家は塀外の小屋に居住し八十四歳の老齡なる故人の母堂の居室さへ之れ無きの有様なり、幸に柳北先生の書齋にして君の不用に○せば程遠からぬ近隣のこと、願くは吉川母堂の居室として柳北先生の書齋を寄贈し呉れずやと物語りしに、和田君日く善哉々々、此の書齋にして斯の如き善行に利用し得るならば、余は悦んで贈呈せんと、○に於て余は其の書齋を和田君より貰ひ受け遠からぬ吉川氏の遺族の居住せる家屋に接して増築することと爲し、柳北先生の舊書齋なるものに更に二室を加へて増築し之を老母堂に贈呈したり。老母堂

之を悦ぶこと甚しく終に其の居室に於て永逝したり。其後吉川氏の遺族故あつて大森に移転するや、和田君寄贈の書齋もまた之を移して建築したりしが、余は吉川氏の令息に向つて此の書齋の由緒を語り、成島先生より和田君に移り、而して和田君の好意に由つて貴家の有となりしものなるを以て、永世保存の誠意を持続すべしと語り置きしが、其の後吉川氏の嗣子もまた失敗し、數年前之を他に売却したり。而も幸に其の家屋購入者は吉川氏の令嬢の他嫁せる者の親戚なりと云へば、余の考へを以てすれば此の書齋たるや柳北先生の居室なりし上に、財界の巨人となりし和田豊治君が落托の境涯を脱して初めて自家所有の家屋に居住し、身を起すの素地を作りたる最も意義ある紀念物なれば、之を現時の持主より譲り受け、和田君に最も關係深き小山或は其の他何れかの地点を選びて建設し永久保存の策を講じたり」と云ふ。

(和田豊治伝より 大正15年発行)



氏田和と堂母るけに關立邸島向年二十四治明

立案三たびに及ぶ

清水 釘 吉

清水組創業者（現 清水建設）

余は幼年の頃、慶応義塾に学びしが、当時塾に於ては大人寮、中年寮、童児寮及び幼稚舎と云ふものありて、余は其の童児寮の一室に居りたる所、童児寮には大人寮の学生にて模範たるべき人各々分れて一人宛監督に来るの制度とて、余の寮監督として丁度和田氏が来られ、極めて短日月の間なりしも、同氏の監督を受けし一児童たるの縁故を有せり。

今日より追憶すれば只だ謹厳にして言葉少き人なりしと思ふに過ぎず、爾來清水組としては氏の鐘紡時代より恩顧を受くること多く、次で富士紡に入りし後は公私共に多大の〇顧を蒙り、会社の増築新設拡張殆ど一手に用命を受くるの信用を得、従つて向島の私邸及び移転したる飯倉の邸宅等、改築増修等何れも清水組の用命を受くる所となり、無上の面目を施したり。

余は以上の関係よりして和田氏の膿大細心なる黙を知るを得て、益々其の人物の偉大なるを驚歎したり。関東大震災の爲め富士紡の各所の工場は非常なる打撃を蒙りしが、直後六日の日なりしと思ふ、和田氏自ら清水組本店に来られ、種々工場の善後策に付き講究し、引続き再度に見えられ具体的の協議に入りし所、氏の性質は遺憾なく發揮され如何にも放膿なるが如く見ゆるも、此の時は微細に亘りて設計上の質問をなし、また意見を述べ決して確定案に入らず、彼是の研究を重ね所謂衆智を集めて最後の決定に入らんとし遂に清水組をして設計工事施工法とも三回の案を立てて参考に供するに至らしめたり。此の三案に対して更に研究し、愈々決定するに至らば施工は非常の速力を以て進捗せしめざれば承知せざるの性質なり。

既に十分の研究と調査とを積みて断案を下すが故に決して悲観を伴はず、非常なる元気を以て復興に努力しつつありしに、遂に起つ能はざるに至りしは濁り富士紡の爲めのみならず、実業界稀に見る人格者を失ひしことに於て国家の損失と謂ふべきなり。

（和田豊治伝より 大正15年発行）

銅像等調査

◎赤抜きの NO. (列) が調査済み、もしくは調査中です。
皆様には、黒文字 NO. の作品の調査をお願い致します。

◎青文字 NO. は、関係者からの報告で、像が現存する
が、あくまでも、未調査である事を示しています。

◎緑文字 NO. は、関係者からの報告で、像が現存しな
いが、やはり未調査である事を示しています。

(最終更新日 2002. 01. 13)

番号 ・ 存否 ・ 所在 ・ タイトル ・ 偉人の倂 ・ 形式 ・ 旧所在地 ・ 竣工年 ・ 制作者

217 静岡県 征清記念銅標 金鵒標 浜松 1902 年 沼田一雅、桜岡三四郎、津田信夫

218 × 静岡県 日比谷平左衛門像 * 立像 駿東郡小山町富士瓦斯紡績会社工場 1907 年 記載なし

し台座は現存 (豊門会館内 大熊氏広作)

219 ○ 静岡県 市川紀元二像 * 立像 東京帝国大学医学部構内 1908 年 新海竹太郎

220 × 静岡県 市川紀元二像 * 立像 静岡県磐田市磐田駅 (旧中泉駅) 東側 1908 年 海野美盛

221 静岡県 井上 馨像 * 立像 蒲原郡袖師村横砂 1910 年 岡崎雪声

222 静岡県 大谷嘉兵衛像 * 立像 静岡市音羽町清水公園 1916 年 記載なし

223 静岡県 綾部 關像 * 胸像 静岡市城内尋常高等小学校内 1917 年 三浦長壽

224 静岡県 高山仰止像 * 立像 浜松市元城尋常高等小学校内 1921 年 武石弘三郎

225 静岡県 日置弾正像 * 座像 周知郡森町天宮 1923 年 記載なし

226 静岡県 恩田鐵弥像 * 胸像、天使群像 庵原郡興津町農林省園芸試験場内 1924 年 唐杉誠一

227 ○ 静岡県 和田豊治記念碑 * 石塔 駿東郡小山町藤曲豊門会館内 1925 年 朝倉文夫

228 静岡県 森永太一像 * レリーフ 田方郡錦田村谷田 1925 年 記載なし

229 静岡県 松島十湖像 * 立像 浜松市東鳴江町長者平鴨江寺 1926 年 山本瑞雲

230 静岡県 橋本馬吉像 * 立像 蒲原郡袖師村秋葉神社内 1926 年 記載なし

231 × 別作 静岡県 清水次郎長 * 座像 清水市梅蔭寺境内 1927 年 吉田三郎

232 静岡県 橘 周太像 * 立像 歩兵第 3 4 連隊衛門前 1927 年 北村西望

233 静岡県 河西哲英像 * 胸像 静岡市県教育委員会構内 1928 年 沼田 寅

234 ○ 再鑄 静岡県 高山林次郎 (樗牛) 像 * 胸像 清水市龍華寺境内 1929 年 朝倉文夫

235 静岡県 金原明善像 * 胸像 浜名郡和田村薬師八柱神社境内 本山白雲

236 静岡県 和田豊治像 * 胸像 駿東郡小山町豊門会館内 記載なし

(屋外彫刻調査保存研究会・事務局)

<http://www4.famille.ne.jp/~okazaki/zenkokuchousa1.htm>

和田君遺惠碑

和田君遺惠碑

桂五十郎撰

喜多貞吉書

正三位勲一等子爵滋澤榮一篆額

和田君豐治來居駿之小山辨紡績工廠事也承積衰困
頌之後廢艱難締造之會密勿經營暴突不黔減少耗費
多積公儲未暮年其業旺矣小山在函根山中舊為二邨
曰六合曰菅沼最爾陋邑境壤犬牙民之休戚往往不齊
而廠事與邨事最多抵牾屢滋事端君深憂之於是務乎
其民興利除害矜其躬領式行範居十餘年隣保和緝知
廠之所以利於邨敦睦之風藹然而成邨之長老告
之併二村為一町出廠資一百本股附之俾司其貸收蓄
其贏餘民大說大正元年邨老相率詣官有請允遂立町
制初二村之民戶四百六十二今則戶三千三百餘口二
萬一百三十七前之本股一百殖至二百餘支二百數贏
一萬五千八百有餘圓圭寄化為輪奐隘巷變為廣衢町
運之隆如日在異位町民僉曰惟君之功蓋町運之隆廠
運之隆也廠運之隆君之功也先是君去小山歸住東京
井州之感不能自己為町致力終始不渝町民益深惠之
君亦樂之既而君歿町民慟哭哀痛僉曰喪父母矣戶揭
旌人廢樂屋號而阜復之越二歲以為未盡胥議曰町之
所以有今日職君惠澤之由不文其事於碑以貽後昆非
人之情也來屬紀實夫職民宰者宜任民安恬而有損民
利已者民每受累苦君不居宰則固無責而小山之民每
侂庇蔭生而親之歟而慕之不啻攀轅轅塞路從非仁人焉
能如此因紀其實系以銘銘曰
君何惠乎勒石以文石可泐也文可泐也君之惠乎不可
護也永在人臆孔塞孔淵湛乎斯土千歲若新
大正十四年十二月 静岡縣駿東郡小山町民建之



和田豐治遺德碑（朝倉文夫 作）

遺徳碑の建設 「小山と豊治君」

豊治君六十餘年の生涯、其事跡は前章回を重ねて説く所の如し。

今彼の一生を通じて其盛業の由つて來りし處を考へ、其徳望の由つて起りし肇を討めるに、其基因たるや実に彼の発奮興起函根の山中に、富士紡会社の窮阨を救はんと決心したる時にあり。豊治君の傳記を読む者の悲壯を感じ、痛快を感じ、満足を感じ、後の偉大なる人物として面目を発揮するの因即ち是に在るかを知るは、正に彼が小山の住民をして専心会社と住民との契合を計り、自ら会社と住民との公僕を以て任じたる時に在り。

上野山重太夫君は当時の豊治君の態度を追懷して日く「後の和田君は聳名の興隆と共に日本帝國々民の公僕となり、私事を以て公事を辭せず、奔走よく天下の事に尽力せしも當時に於ては事苟くも社用と六合菅沼兩村の公事にあらざれば、即ち敢へて他人に要談せず、他業に關興せず、世の和田君を要望する看の爲めに門戸を閉鎖して入るを許さざりき。

蓋し此の赤誠眞摯の情は一度天下の和田となるに及んで、公僕たるの精神愛に一举にして天下に広充爛漫したる所以のものなり」と。

誠に豊治君と小山と富士紡とは、豊治君の全事業の核子をなすものなり。或は町制施行の援助に、或は、財本の寄附に、或は物品の贈與に、生涯を通じて春々の情を小山に送りて忘れず。小山町民もまた豊治君を敬すること慈父の如く、逢ひては之を悦び、一憂に當りては之を悲み、休戚を分ちて豊治君の爲めに愛憐せらるるを榮としたりき。

町政張り、町民繁榮を來し、紀念の祝典を舉ぐるや、功を豊治君に歸して感謝状を贈るが如き情味の濃厚を來したることは、本傳之を詳逸したる所の如し。

大正十二年十一月豊治君重患の報小山町に至るや、町民愕然として驚き舉つて平癒を祈願す。十二月六日町代表として町會議員、小野駅一、山崎銀次郎、室伏辰次郎の三氏をせしめ、上京麻布の邸に詣り、親しく病床に伺候し見舞品を贈呈す。十三年三月四日豊治君病終に癒へず、其の訃小山に達するや、全町憂愁の氣に鎖され、人々骨肉の親を喪ふが如く、哀傷の極食を廢するものあるに至る。

四月六日小山町會は召集され、満場悲痛の裡に舉町哀悼の吊意を捧ぐるの決議をなし、告別式當日は町長室伏完君上京しで弔辭を述べ、町會議員及び区長全員舉りて之に参列し町内各戸何れも弔旗を掲げ、演芸場、興行物、飲食店、料理店等は、皆歌舞音曲を停めで弔意を表し、小山工場の主催にて舉行せらるる告別式當日の遙拝式には、町役場吏員全部及び町民一同参拝をなし、三月十五日遺骨の駿河駅を通過するや、町會議員各区長其他一般町民何れも業を休みて汽車沼道に堵列して之を送り、三月十八日本葬の中津町に行はるるや、町會議員小野蹄一、山崎銀次郎の二氏町長代理及び町代表として之に参列し、以て盡くるなき断腸哀痛の意を表したり。實に小山町と豊治君とは、人物と事業と、場所との縁故を永遠に結合して豊治君の美名と共に萬代榮譽を荷うものと云ふべきなり。

「和田豊治傳」（大正14年 和田豊治編纂所）より



日比谷平左衛門像



台座

この第三工場の開業式は予て同会社合同の難関に処し絶大の功労ありたる日比谷平左衛門氏の銅像除幕式と相兼ねて去る24日正午より全会社敷地内に举行せらる来賓には李家知事、辻駿東郡長、水野事務官補、日比谷家々族その他京浜の有力なる実業家、新聞記者等約五百名に及びたり京浜の来賓は新橋より一二等臨時列車にて正午12時小山に着し同時に知事一行と工場内広場の休憩所に於て数番の余興とすし、ビール等の饗応あり午後一時より祝典係員の案内にて第三工場の発電所より始め順次各工場を縦覧し新に設けられたる鮎沢稲荷社内の式場に参集す、かくて席定まるや君が代の奏楽ありて社長浜口吉右衛門氏開会を告げ事業の報告をなし来賓総代福沢桃介氏の祝辞ありて日比谷銅像除幕式に移り建設発起人総代森村市左衛門氏令息代つて建設の歴史を報告し日比谷氏令孫嬢糸を引いて幕を撤す来賓一同拍手して偉風を迎ふ次に浜口社長の式辞、李家知事の祝辞ありて富士瓦斯紡績会社の万歳を三唱し一同銅像を一順して職工寄宿館前の広場なる立食場に於て立食の饗応ありて隨時散会す此日初夏の天候鮮かに鮎沢川の流水淙々として無限の音楽を奏するが如く四山の新緑は西の方芙蓉の残雪と相對して富士瓦新紡績会社の前途を祝福するものに似たり
(『静岡民友新聞』明治41年5月26日)

※ 福沢桃介 今、在りせば…。巨人福沢諭吉を義父に持ちながら、諭吉に反発し、独歩の起業家精神を貫き通した電力王・桃介。傲慢と謙虚、冷酷と温厚、山師と篤志家、スキャンダルとロマン、相反する言動と評価のなか、日本を襲う幾多の経済危機を見事に乗りきってみせた鬼才といわれた男。



和田豊治像（会館内）

朝倉文夫（あさくらふみお）

1883年（明治16年）渡辺要蔵の三男として生まれました。1893年（明治26年）朝倉種彦の養子となり4月に直入郡高等小学校（当時竹田市は直入郡（なおいりぐん））に入学しました。1903年（明治36年）20歳の時、東京美術学校彫刻選科に入学し、1907年（明治40年）卒業作品として「進化」を作成し、研究科に入学しました。その後1908年（明治41年）10月第2回文部省美術展覧会で「闇」・「老猿」、1910年（明治43年）10月「墓守」等次々に受賞作品を完成させていきました。現在竹田にある作品は、1917年（大正6年）10月の作品「時の流れ」は豊後竹田駅前に1971年（昭和46年）設置されました。1937年（大正12年）作「杉山敦磨胸像」は竹田高等学校に、1940年（昭和15年）作「文武の像」も竹田高等学校に、1943年（昭和18年）作『翼』に続けは竹田市役所に、1946年（昭和22年）作「生誕」は竹田市勤労青少年ホームに、1949年（昭和24年）作「三相」は竹田文化会館に、1950年（昭和25年）作「瀧廉太郎像」は岡城本丸跡に、1957年（昭和32年）作「藤丸警部坐像」は西光寺に、1959年（昭和34年）作「競技前」は竹田高等学校にそれぞれ設置されています。この様に日本近代彫塑技法を確立し、明治・大正・昭和にわたり、日本美術界の重鎮であった彫塑家です。自然主義的写真描写に徹した精緻な表現姿勢を一貫して保ち続け、「東洋のロダン」と呼ばれました。

竹田温泉「竹田茶寮」 瀧廉太郎銅像から <http://www.h4.dion.ne.jp/~chikuden/>
朝倉文夫の略歴

- | | |
|-----------------|--|
| 1883（明 16） | 3月1日、大分県大野郡朝地町に生まれる |
| 1893（明 26 10 歳） | 朝倉宗家を継ぐ |
| 1902（明 35 19 歳） | 竹田中学校を中退 上京し実兄の彫塑家、渡辺長男宅（旧下谷区谷中初音町）に住み彫塑を学ぶ |
| 1903（明 36 20 歳） | 東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻選科に入学 |
| 1907（明 40 24 歳） | 同校彫刻選科卒業、卒業制作「進化」 谷中天王寺にアトリエ新築、朝倉塾として子弟養成 |
| 1908（明 41 25 歳） | 第2回文展「闇」2等賞（最高賞） 文部省買上（原型なし） |
| 1909（明 42 26 歳） | 東京美術学校研究科終了 第3回文展「山から来た男」3等賞 文部省買上 |
| 1910（明 43 27 歳） | 第4回文展「墓守」2等賞 文部省買上 |
| 1911（明 44 28 歳） | シンガポール、ブルネイ、その他、南洋を視察
第5回文展「土人の顔、其の二」3等賞 文部省買上 |
| 1912（大 1 29 歳） | 第6回文展「若き日の影」3等賞 文部省買上 |
| 1913（大 2 30 歳） | 第7回文展「含羞」2等賞 |
| 1914（大 3 31 歳） | 第8回文展「いづみ」2等賞 |
| 1916（大 5 33 歳） | 文展審査員に任命される |
| 1919（大 8 36 歳） | 帝展審査員に任命される |
| 1921（大 10 38 歳） | 東京美術学校教授に任ぜられる（山田やまと結婚） |
| 1922（大 11 39 歳） | 摂子生まれる |
| 1925（大 14 42 歳） | 響子生まれる |
| 1927（昭 2 44 歳） | 第1回朝倉塾彫塑展覧会（東京都美術館） |
| 1934（昭 9 51 歳） | 台東区谷中天王寺町、初音町にアトリエを改築、朝倉彫塑塾とする |
| 1944（昭 19 61 歳） | 過去40年間に制作した像、約400点 戦争による金属回収のため彫像のほとんど消滅、うち原型300点は保存 |
| 1945（昭 20 62 歳） | 帝室技芸員に任ぜられる |
| 1946（昭 21 63 歳） | 12月、妻やま死去（享年60歳） |
| 1948（昭 23 65 歳） | 第6回文化勲章授与（大分県1号） |
| 1958（昭 33 75 歳） | 日展顧問となる |
| 1961（昭 36 78 歳） | 台東区名誉区民推戴 |
| 1964（昭 39 81 歳） | 4月18日、急性骨髄性白血病にて死去 |

朝倉文夫記念館 <http://www4.ocn.ne.jp/~asafumi/memorial/asakura.html>

近代彫刻の先駆者・大熊氏広

大熊氏広（1856 年～1934 年）

・埼玉県 鳩ヶ谷市出身。明治 9 年、日本の本格的美術学校である工部美術学校が創立されたに「彫刻科」に入学し、一期生を主席で卒業。

その後、「有栖川邸」の彫刻を担当する。腕を買われ、「大村益次郎像」制作の依頼を受ける。更なる技術向上の為、留学を決意、三菱財閥 2 代目：岩崎弥之助の援助を受けヨーロッパに留学します。この日本初の西洋式銅像の成功により、その名声は不動のモノとなる。

彫刻の多くは当事者の依頼によるもので、モデルは皇族・政治家・軍人・実業家・学者と幅広く、当時の日本を代表する彫刻家として重きを成していた。

現存する主な作品・・・大村益次郎、有栖川宮熾仁親王、小松宮彰仁親王、八甲田山雪中行軍記念像（後藤伍長）、伊能忠敬、福沢諭吉など

大熊氏広作品集・4



日比谷平左衛門



橋本綱常



後藤新平

小山町民の豊治君崇拜敬

前に述べたる如く今日の小山町と言うは、其昔明治二十年頃迄は単に六合村と称する小村内の大字に過ぎずして全く狐業狸穴の觀ありしが、明治二十九年富士紡績会社が創立せられ始めて工場を小山に起したる時よりして、爾来年々工場の増設、貨物運搬の繁栄、職員職工の居住増加等に従ひて、漸次繁栄の地となり、鉄道停車場の拡張、郵便局の設置、二三銀行支店の設立等ありて、全く舊時の面目を一新し、明治四十二三年頃には戸数二千に近く、居住者は一萬五六千人を算するに至り、爰に村治関係者及び有志の間に菅沼、六合両村を合併して町制を施かんとするの議を生じたりしが、氣運未だ熟せずして一時中止したり。然れども地方繁栄の勢いは停止する所なく、終に二三年を経過したる大正元年を以て小山町制を施くに至りたり。比菅沼六合両村の急激なる発展は一に富士紡績会社の拡張発展の努力の負ふものなるを以て、小山地方の人々の豊治君を尊敬崇拜すること他人の想像する能はざる所にして、明治四十三年峰水力電気工事完成の時小山地方の人豊治君の徳を敬畏して、豊治君を神に祭りたしとの希望を工場長棚橋琢之助君に申出でたる程なりき。

「和田豊治傳」（大正14年 和田豊治編纂所）より

●大分県中津市北門通（きたもんどおり）和田公園内

大実業家 和田豊治

中津藩お鷹部屋和田薫六の長男、近くの家塾で漢学習字を学び、十五才の頃範匠村上田長の書生となつて独学し、後、田長の勧めで藩の奨学金を受けて上京、慶応義塾に入り、同郷の先輩中上川彦次郎、朝吹英二などの後を継いで米国に渡り、新知識や技術を学び特に紡績工業に注目し、感銘を受けて帰国した。



●和田豊治の碑

大会社の要識を経て、富士紡にいり、異常な熱意と努力によって、経営不振の会社を建て直し、紡績の町、静岡県小山町では大恩人として尊敬されている。（立て札より）

ヴィバ中津サイト <http://www5b.biglobe.ne.jp/~roo-1/index/index.htm>

朝倉每人日記より

近代日本史料選書 山川出版社 1991 年発行 全6巻

(1) 小山を去る

前後八年余を暮らした小山の地も大要震災の復興も出来上つたので、大正十四年秋常務取締役役に就任することになり、小山を去ることになった。一木一石、寸石尺土、よく馴染みとなった、幽郷小山を去る心構は、何ともいえぬ名残り惜しさに堪えなかつた。永年顔と顔とをあわした知人故旧と袖を分つことの淋しさは何に譬うるよしもなかつた。殊に永い間、起き臥しをした、茅屋、前に流るる鮎沢川や南方に連る足柄山の最、西窓に仰ぐ芙蓉の峰など風致に富む山荘に分るることの如何にも忍びがたいものがあつた。山荘は昔そのままの農家造で、瀟酒たる茅葺の家で、簡素生活には叶つたりの建方に出来て居る。六合山荘と称して富士紡初代の杜長富田鉄之助翁の為に設けられた邸である。荘名は勝海舟先生のつけられたもので、以前先生自署の「六合山荘」の木彫の扁額が椽先き楣間に掲げられてあつたと云うことを、聞いて居る。何とかしてこれを元の通りに復活したいと、捜したところ、同町の素封家室伏完氏の倉庫に収めてあることが分つた。聞けば、富田翁が同荘を去つて帰京する時、室伏氏に紀念として胎つたとのことである。私は室伏氏に請うて、これを譲りうけ、再び山荘の楣間に掲げることが出来た。丁度私も小山を去る間際であつたかたがた、好記念にもなった。更に震災のため裏山の崖が崩れた時にころげ落ちた巨石の形がいかにもよいので、これを洗い浄めた上「和田氏来居之迹」とゆう七文字を刻して、庭内の中央老樹の根元に建てて和田翁の住居した記念の碑を仰ぐことが出来た。彼の「六合山荘の扁額」、此の「和田氏来居之迹」の石碑は共に此の山荘の歴史を雄弁に語るものとなった。

六合山荘扁額之記 騎堂

鉄畊富見田翁嘗嘗別業于小山、名曰六合山荘、海舟先生為書贈扁額、筆勢雄勁高雅可賞也。翁去小山時、貼之室伏氏、及歿後嗣子完君以為不忍私之、余乃請君使之再掲山荘楣間、先生靈有、知其必莞爾含笑於泉下耶。

此山荘を去る年の前年夏の夕、朝日の顧問西村天囚先生をお迎したことがあつた。椽先きで涼風を掬しながら、四方山の談にふけて居たが、先生には、傍にあつた筆を執られて、画帖に「疑雨帖」と題せられ、「蓼々」の二字を揮毫された。これは庭先の山かげから落ちる水の音が恍惚として聞えて居る。投意揮毫されたことは想像に難くない。翌夜もお出になりて山荘の風光を賞せられて、おすきな芳醇を傾けながら一宵話し通したことがある。其節私のために一文を草して呉れた。それは恩人草野氏から贈られた一少匣に題するもので、流石当代一流の碩学、能書能文家だけありて、珍襲また範とすべきものがある。天囚先生終生の事業として大阪懷徳堂の完成に努力せられた甲斐もありて、其存在がわが儒教文化のために有意義のものであることは敬仰に値する。其後幾許もなくして、他界されたことは哀惜の至りである。

此山荘を去るに臨みて、知友数名と膝を交えて一夕、離荘の会を催ほした際、左の一詩を吟じた。

幽栖茅屋負山開 一脈清流脚下来

復旧漸成吾合去 欣然交友別離杯

この拙詩に次して同地の元老湯山剛平翁から玉韻をよせられた。

駿山鮎水為君開 辛苦業成幸福来

鴻德欲酬猶難尽 町民惜別泣衛杯

父の交友関係（同書最終巻から）

朝倉孝吉 文

大正八年に、富士紡の発祥地であり、穀倉であった小山工場の工場長に就任する。小山町はかつては全くの寒村であったが、明治二十九年富士紡の創立で、この地に工場が設立されることとなった。工場敷地の買収で坪七〇～八〇銭の土地が二円から三円近くまで値上りし、土地成金もできた。工場建設後工員が他の地方から流入し、人口は急増を続け、紡績工場としては東洋一の大工場となった。

小山工場長の役宅は、富田鉄之助、和田豊治も住んだ旧豪農の家で、勝海舟の「六合山荘」の額がかかっていた由緒ある家であった。

小山工場時代は、同工場が県下有数の大工場(当時、紡機二五万錘、織機約二千台、従業員一万人、五つの工場と三つの水力発電所をもっていた)であった関係上、静岡県下の工場協力会議長をはじめ県方面委員、勤儉貯蓄奨励委員などをしていたため県下の有力者との交際範囲が広くなると共に、大正九年取締役になり、財界人との接触も多くなる。一万人の従業員を擁する小山工場は、町全体が工場でできたようなもので、工場の厚生、教育、衛生、保健、娯楽の諸施設は町の施設でもあった。同時に農業と工業との調整もよく行われ、添田寿一、塩沢博士、気賀博士、永井博士ら労資協調会の幹都や労働問題の権威が工場を視察に来て昵懇になっている。父自身も協調会の『社会政策時報』の第一巻に「農工調整問題」について論文を書いている。父は小山時代が最も充実した思い出多いよき時代であったと後年よく語っていた。



朝倉每人氏が建てた石碑（平成 15 年 12 月 4 日撮影）



日本土木学会 平成6年発行

紡績工場の正門

34

森村橋

もりむらばし

静岡県東部の山あいの町、小山は、綿糸生産の町である。鮎沢川沿いの狭い谷間に、富士紡績株式会社小山工場とその関連施設が展開している。この工場は富士山の雪解け水を集めて流れる鮎沢川の豊かな水力（当初は水車動力、のち電力）に依存して明治29年（1896）に創業したもので、100年近い歴史がある。

この地に鉄道が開通したのは、明治22年（1889）2月1日のことで、東海道線の国府津－静岡間が開業したのである。同年7月1日には東海道線新橋－神戸間が全通した。当時は、現在の御殿場線が東海道線であり、熱海・丹那トンネル経由の現在の東海道本線が開通し、旧線が御殿場線と改称されるのは昭和9年（1934）12月1日のことである。

さて本題の橋は、かつての東海道線小山駅（現御殿場線駿河小山駅）から、鮎沢川の対岸にある工場に通じるトラス橋であって、創業から10年後の明治39年（1906）に完成した。

当初は、橋の中央に軌道が敷設され、トラスの外側に歩道がついていた。

また、工場の正門にある橋であるから、それにふさわしい意匠が整えられていた。いまではほとんど失われてしまったが、橋門構上部の橋名板、家紋の透かし模様、街灯などが付属しており、橋詰の柵も相応のものであった。

橋名は、富士紡績の創業に関わった人物の一人、森村市左衛門に由来している。会社にとっては、創業時代の由緒ある橋であるから、近年実施された修理も、外観を大きく変えることなく、苦心の補修・補強が施され、大切に扱われている。

さて、このトラス橋であるが、構造的にはアメリカ流のピン結合プラットトラスで、引っ張り力が作用する下弦材や斜材にはアイバーが使われている。端柱は鉛直で、上弦材は放物線（折れ線であるが）を描いている。路面を支える床組みが下弦材よりも下に吊り下げられている構造も特徴の一つである。また、形鋼に BURBACH などの浮彫り文字が読み取れるので、材料は、ドイツのメーカーから輸入されたものであることがわかる。

なお、上述の修理は下弦材と斜材とそれらの結合点（格点）あたりに集中しており、実質的にピン結合から剛結合へと補強されている。

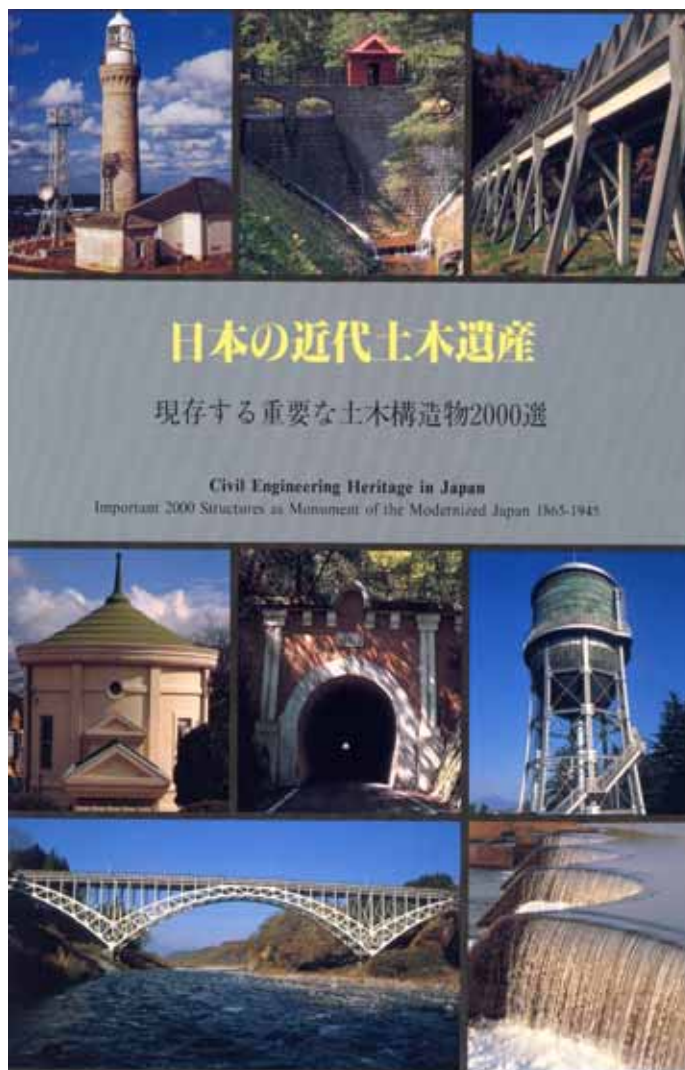
橋には2種類の銘板が取り付けられている。いずれも縦書きであるが、1枚には「東京石川島造船所 明治三十九年製作」、もう1枚には「設計者 秋元繁松」とある。初めの1枚は、銘板に必ず表示する事柄であるが、後の1枚の設計者を表示した例はわが国ではまれで、大変めずらしい事例といえよう。なお、秋元繁松は京都帝国大学土木工学科を明治36年に卒業した人である。

〔K J〕

開通年月：明治39年（1906）11月
所在地：静岡県小山町
河川名：鮎沢川
橋長・幅員：約40 m × 4.877 m（主構中心間距離）
径間数・支間長：1 × 39.0 m
形式：下路曲弦プラットトラス（ピン結合）

日本の近代土木遺産（土木構造物 2000 選）

名称	市町村	付帯情報	形式	諸元	完成年	文化財等	ランク	評価情報
森村橋	小山町	富士紡績・小山工場への入り口（小山駅～工場間のトロッキ軌道）／鮎沢川	鋼プラットトラス（曲弦、ピン結合、下路）	長約40m、S39.0m（T）	明治39 製→道 路化		A	設計：秋元繁松、製作：東京石川島造船所／斜材取り付け部を補強／橋門構隅角部に唐草模様／会社の創立に貢献した森村市左衛門から命名
須川発電所取水堰堤	小山町	東京電力（富士紡績）／須川	練積C堰堤（全面溢流式、越流部＝直線）	高11.43m、長44.84m	大正1		B	高さ10mを越える保存状態の良い練積方主堰堤
生土発電所	小山町	東京電力（富士電力）／鮎沢川	RC建造物（ろく屋根）	最大6200Kw	昭和5		C	壁面のピラスター列：簡略化された柱頭をもつオーダー＝ユニークな造形



ランク A～Cの3ランクに分けて表示する。ランクは、後述の『評価基準』に準じて、下記の評価情報を参考に決める。Aランクは最も重要な土木遺産で、国指定重要文化財に相当する。Bランクはそれに次ぐ重要な土木遺産で、都道府県指定の文化財に相当する。CランクはA・Bランク外の重要な土木遺産で、国の登録有形文化財や区市町村指定の文化財に相当する。ランクは確定的なものではなく、一応の目安として考えていただきたい。AランクとCランクの差は明らかであるが、AとB、BとCのように隣接したランク同士では差は僅かである。

編集 土木学会 土木史研究委員会 委員長 佐藤馨一
 発行者 社団法人 土木学会 三好逸二
 発行所 社団法人 土木学会
 発行日 平成13年3月30日

向島和田邸海堂園に於ける鷗会



豊門会館移築完成 大正 15 年 3 月 3 1 日撮影





豊門会館開館式 大正 15 年 5 月 16 日





和田豊治氏遺徳碑除幕式典
朝倉文夫 作



昭和 13 年 2 月 1 5 日
飯沼静岡県知事記念撮影

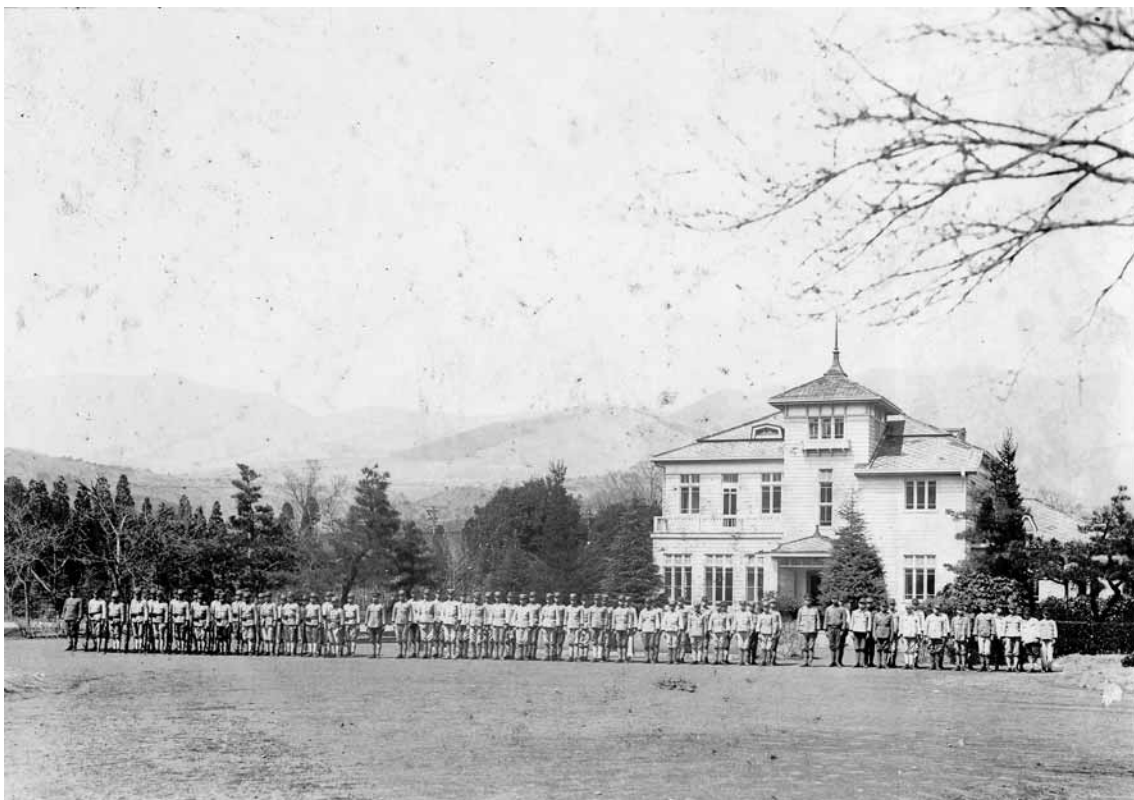
徳富蘇峰 昭和 11 年



李王垠殿下豊門会館ニ御投宿 昭和 14 年 1 2 月 2 日



豊門青年学校（撮影年月日不詳）



天皇閣下静岡県へ行幸ノ御砌侍従子爵黒田長啓氏ヲ小山工場ニ御差遣 昭和5年6月2日



小山時代和田氏の住宅



「六合山莊」扁額が掲げられていた頃



現在の工場長宅

